

徳山藩江戸藩邸変遷 その時代背景とともに その一

会員 小原 肇

はじめに

筆者は母方の祖に徳山藩士（福岡家）を持つが、私自身は東京生まれの東京育ちである。曾祖父の時代までは徳山に居住していた。東京大空襲で灰燼に帰した現在の東京には、大名屋敷の遺構はほとんど残っていない。わずかに表門がいくつか残るだけだ。しかし、戦後大規模な開発復興を遂げていった東京も意外と道や坂の位置、敷地取りはそのままであることが多く、江戸時代の大名屋敷図と照らし合わせることが可能である。江戸大名屋敷に関する研究はこれまでに多数行われているが、徳山藩江戸藩邸に関しては身近な資料として「徳山市史料」

に記述があるものの、まだまだ十分とは言えない。

もちろん徳山藩邸の遺構等は一切残されていないので、知り得る限りの当時の屋敷の周辺環境、時代背景、他大名の屋敷、大奥との繋がり等を織り交ぜ類推しながら江戸藩邸を調べ、思いをはせてみたい。

拝領屋敷の種類

江戸に幕府から拝領していた藩の屋敷を「上屋敷」、「中屋敷」、「下屋敷」等という。その用途については割愛させていただが、大名の規模や家格に応じての広さや場所を幕府から拝領した。それ以外に「抱え屋敷」といっ

て藩が独自に購入等で調達した屋敷や、大藩だと「蔵屋敷」もあった。ちなみに徳山藩のような小藩は中屋敷や蔵屋敷を持っていなかった。維持費もばかにならなかったのだろう。徳山藩は寛永十一年（一六三四）の下松藩正式認知後に最初の上屋敷として寛永十二年（一六三五）小石川に三千坪の屋敷を拝領した。この屋敷が小石川のどのあたりの位置にあったかは、はっきりしない。参勤交代制もこの年に始まった。

小石川のこの屋敷も三千坪と上屋敷にしては手狭であった事もあり、もう少し広い場所に移りたかったのだろうか、約十年を経過した正保四年（一六四七）には、鳥原の乱の失政の責を問われ改易された肥前唐津藩主寺沢堅高の屋敷に、多くの大名家から拝領の願いが出された時、毛利就隆も再び拝領を嘆願した。結局この就隆の願いは聞き入れられなく他の大名へ拝領されたが、ダメ元であっても屋敷を移りたいという意志表示は重要であったと思われる。

三田小山上屋敷

明暦四年（一六五八）五月「毛利日向守 屋敷狭二付、願之通替地被仰付」（東京市史稿 市街史第七）



「江戸大地図」（元禄年間 1688-1703 頃）
三田小山の徳山藩上屋敷付近。毛利式部と書いてある（2代藩主毛利元賢のこと）。

度々の意思表示の甲斐もあってか、万治元年（明暦四年一六五八）に三田小山に五千九百坪と小石川の倍近い広さの上屋敷を拝領することができた（図「江戸大地図」参照）。明暦三年（一六五七）の明暦の大火で類焼の記録もあるので実際の拝領は承応三年（一六五四）のほう

が正しいのかもしれない(徳山市史料)。この三田小山の徳山藩邸は以降万役山事件で改易屋敷没収される正徳五年(一七一五)までの藩政初期の約六十年間を上屋敷としており、二代元賢、五代広豊らの藩主達はこの上屋敷で生まれている。現在の港区三田二丁目(現中央省庁三田共用会議所付近)で、四代目藩主毛利日向守元克にちなんで「日向坂」が今もある。



徳山藩三田小山の上屋敷跡(写真右手あたり)港区三田二丁目付近の日向坂(ひうがさか)木標には、「江戸時代前期南側に徳山藩毛利日向守の屋敷があった。袖振坂ともいった。由来は不明である。誤ってひなた坂ともよんだ。」と書かれている。

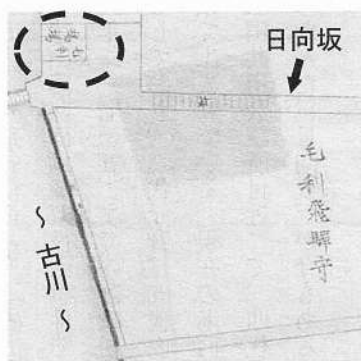
日向坂

久保町の通にあり 江戸図説に新堀へ渡す橋を日向橋といふ むかし毛利日向守の屋敷ありしよりの名なりといふ 此日向橋と書しは二の橋の事にて則久保町の通りなればその名のうつりしなるべし たゞ日向をひなたと唱えかへし事疑うべし

木標の説明書きはこれを出典としているのかもしれない。現在の古川にかかる「二之橋」が昔は日向橋と言われていたとも書かれている。いづれにせよ、東京の真ん中で徳山藩ゆかりの名前が書かれた坂が今でもあるのはなんともうれしいものだ。元禄十六年(一七〇三)三代藩主毛利元次がこの三田小山屋敷の主であった頃、二軒東隣の伊予松山藩中屋敷(現イタリア大使館)で大石主税、堀部安兵衛等の赤穂浪士十名が切腹した。イタリア大使館内にはその碑があり、今でも毎年この命日には駐日イタリア大使が供養をおこなっているという。徳山藩上屋敷の近所でもあり、また同じ長州支藩の長府藩毛利家上屋敷(現六本木ヒルズ)でも十名が預けられ切腹をし

ば、

大日本地誌大系第四巻の御府内備考三田總説によれ

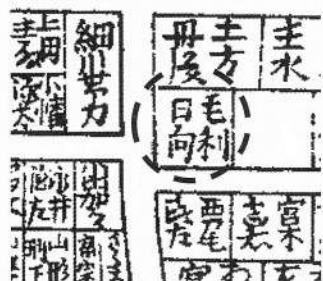


「御内場末往還其外沿革図書」

元禄十二卯年之形 三田小山屋敷揚場位置

日向坂を下った古川にかかる二之橋の北側には船着き場があった(図中:毛利揚場と表示)蔵屋敷を持たなかった徳山藩では古川で運搬船を使った物資の揚げ降ろしをここで行なっていたとみられる(毛利飛騨守=元次)。

っており、徳山藩邸内でも大いに話題になっていたことである。赤穂事件(以降、忠臣蔵)がらみの話したが、松の廊下刃傷事件当日。浅野内匠頭と吉良上野介の江戸城内の控席は同じ「柳の間」、当時の徳山藩主毛利元次も同じく「柳の間」である(※1)。松の廊下は「柳の間」から中庭を挟んだ向かい側にあった。「柳の間」に詰めていた内匠頭と上野介が口論となり、廊下に出て行った上野介を内匠頭が追って行く。そんな姿を毛利元次も見ていたのかと想像を豊かにしてしまう。そんな元次もまさか十二年後に自分の藩が取り潰しにあうとは思って

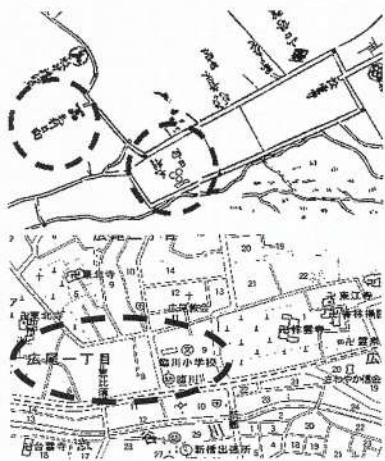


「新添江戸之図」 明暦三年
愛宕下にあった下屋敷。

下屋敷

いかなかったであろう。この三田小山屋敷は西側を古川に面しており船を使った物資の運搬を行なっていたと思われる。古川を上流に遡ると渋谷川と名を変え渋谷川沿いにあった渋谷下屋敷への運搬にも便利であったであろう。古川は逆に下流で江戸湾へと流れこんでいる。上屋敷は徳山藩が麻布今井谷へ移った後は後述の鯖江藩(福井)間部家が拝領し、その後更に柏原藩(兵庫)織田家の屋敷になっている。

下屋敷に関しては三田小山の上屋敷拝領より早い明暦三年(一六五七)に愛宕下(二千百五十二坪、現在の西新橋二丁目十五番地、西新橋二丁目西信号の東側、虎ノ門ヒルズ東向い)に拝領している。新添江



「江戸方角安見図 延宝年間」と現在地図

渋谷川沿い祥雲寺の西側に毛利日向の名前が二つ見える。この頃の渋谷下屋敷と抱屋敷は江戸の南西のはずれて周辺は畑や森林が多い場所であったようだ。現在も祥雲寺はあり、下屋敷はその隣の現在の臨川小学校以西のあたりと推測される。

戸之図（明暦三年）にその名前が見える。

この下屋敷は寛文三年（一六六三）に売却、替地を目黒行人坂に購入している（その後明王院に寄付）。その後寛文九年（一六六九）渋谷新横町（三千百坪、旧豊分町、現在の広尾一丁目、恵比寿橋付近）に下屋敷を拝領、更に近隣の下渋谷村（四千五百坪、同じく広尾一丁目）にも抱え屋敷を購入している（のち売却）。

三田小山上屋敷あれこれ

没収となった徳山藩三田小山上屋敷は、幕府老中間部まなべ詮房あきふさの屋敷となった。間部詮房は「正徳の治」でも知られるが、徳川家宣の將軍職襲継とともに、老中格、側用人となり、上野高崎（五万石）を領有し、城主にまで出世をとげ、家宣没後には幼小の徳川家継を補佐し、幕政推進の中心的人物であった。しかし、徳川吉宗が八代將軍となると、詮房は罷免され越後村上（五万石）に転封を命じられた。この時、万役山事件後徳山藩改易で空き家となった三田小山上屋敷を間部詮房が拝領したのである。しかしそれまで馬場先門や西丸下に屋敷を持っていた間部詮房にしてみればある意味左遷といっても過言ではない屋敷替えなのだろう。

間部家文書によれば、

「御屋敷 三田小山六千五百七十二坪 毛利飛騨守様元屋敷 享保二年二月二日御拝領」とある。享保二年とは一七一七年のことである。

毛利飛騨守とは三代藩主毛利元次のこと。間部家は、

次の藩主間部詮言（間部家二代）の代に更に越前国西鯖江へ転封となったが、屋敷は変わらず江戸後期に至る。鯖江藩八代藩主間部詮実（間部家九代）は「私埒坪数」なる記録をのこしており、このなかで三田屋敷の景観について以下のように記述している。

「大木多くして盛夏の比は萬葉千枝、鬱々森々たり、中には奇なるは榿柳、高野槇、木柵の大木なり、先代主膳正詮允の比迄は狐狸变化の怪談ま、ありて、他家にては妖怪邸と称して最恐怖せし程なりしが、忝なくも父下総守詮勝、日夜丹精を描んで、法華経祈誦し賜ふ、信心の功德にやよりけん、怪奇の事は果と止ぬ」

他家からは「妖怪邸」と称され周辺一帯が恐れられていたことなど興味深いことが記されている。今の東京都港区三田、当時の江戸の三田あたりは武家屋敷街といっても、塀の中はうっそうと木々が生い茂り狐や狸が住む森のようなどころであったらしいのだが、この三田屋敷に徳山藩毛利家が住んでいたのは間部家より更に前なのだから、推して知るべしであろう。間部家の三田屋敷は

結果的にみれば、七代藩主詮勝（間部家八代）の時代まで鯖江藩の江戸上屋敷として長きにわたって使用されており間部家は、この屋敷には天保十一年（一八三九）まで約百二十年間住んでいたことになる。以後幕末までは丹波柏原藩織田家の上屋敷となっている。

三田小山屋敷周辺は現在でも東京の中でも数少ない緑豊かな良好な環境を保っている地域で、旧通信省ビル、綱町三井倶楽部、イタリア大使館、オーストラリア大使館等があり、日向坂から見る景色は緑豊かだ。江戸時代においても後述のF・ペアトが愛宕山上から撮った

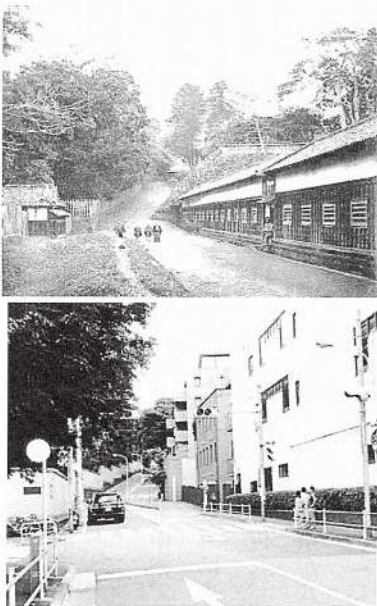


写真 A（今昔）南側より

有名な写真に写る武家屋敷街とはまた一味違った環境の場所だったのであろう。この三田小山の上屋敷周辺の雰囲気がかかるものに、幕末の文久三年（一八六三）、フェリックス・ペアトが撮った写真がある（原題「The Shimabarah-an Fief Second Residence」）。

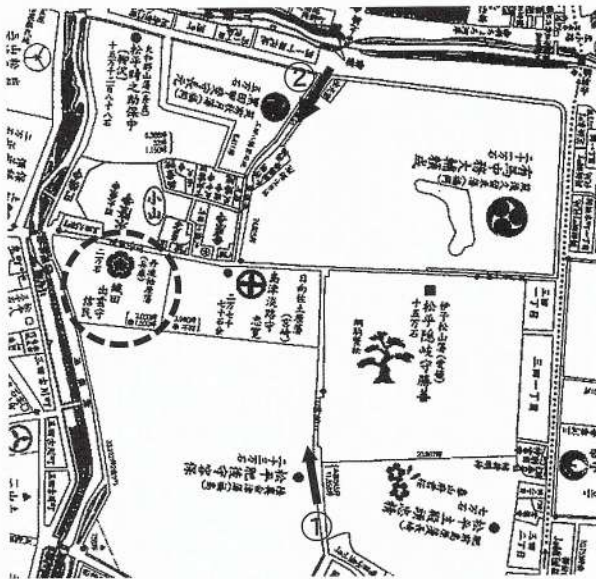
写真A（矢印①方向より）右に見える長屋塀は島原藩松平家下屋敷（現在慶應大学）、その奥が伊予松山藩中屋敷（既述の赤穂浪士切腹の地の一つ、現イタリア大使館）で奥に見える坂（網坂）の左手が会津藩下屋敷、網坂を上りきった先を左折すると日向坂、下る左手に徳山藩上



写真B（今昔）北側より

屋敷があった。特にこの写真を見ると、道の曲がり具合や坂の傾斜が当時とほとんど変わっていないことがわかる。

写真Bは原題「The Arima Sama... Yedo」とされるもので右手は秋月藩黒田家（五万石）上屋敷、左手は久留米



丸点線が三田小山上屋敷。この切絵図時代は間部家の次の家主、織田家上屋敷と表示されている

藩有馬家(二十一万石)上屋敷である(矢印②方向より)。ベアトが撮影しようとしたところ黒田家中の者が出てきたらしく中央付近に三人の武士が写っている。写真正面奥の元神明宮(現存)の杜の横の坂(神明坂)を登り切った突き当りが「日向坂」であり、そこを右に下る途中の左手に徳山藩の上屋敷があった(前図丸印、この切絵



図時代は間部家の次の家主、織田家上屋敷と表示されている。この神明坂周辺の町屋は俗に「鼠穴、巢穴」と呼ばれていたという。これは明らかに古川対岸の丘陵部「狸穴」を意識した地名である。地図北側の現在ロシア大使館がある付近が現在の「港区麻布狸穴町」で、このことからこの一帯が狸や狐がいる森のようなところであったことが想像される。現在の地図と比較すると当時の江戸時代の武家屋敷地の敷地形状や道は、広がったとはいえ現在に継承するものが多い事がわかる。

麻布今井谷上屋敷

万役山事件後、忠臣蔵さながらの元藩士達の活躍で徳山藩再興となった享保四年(一七一九)六月に上屋敷を北本所二ノ橋(三千坪)に拝領した(老中酒井修理太夫忠音上り屋敷)。現在の両国駅そばの江戸東京博物館の東側あたりである。不思議な事に北本所に拝領のわずか一ヶ月後に上屋敷は麻布今井谷に拝領替えになっている。当時本所・深川地区は江戸の範囲を示す「朱引き」

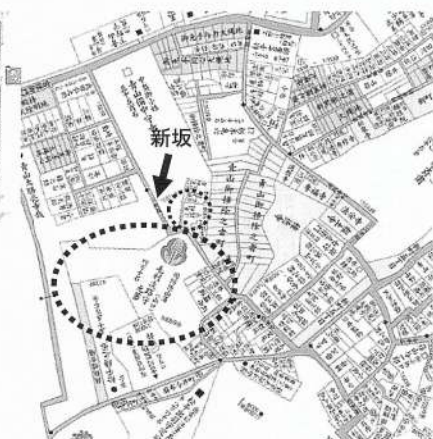
の内ではあり十数年前（元禄年間）頃から武家地や町人地が増えてきたとはいえ、それでも隅田川の対岸の町はずれ、江戸の外れといった場所であった。隅田川にかかる両国橋は名前の示すとおり二つの国を結ぶ橋、「武蔵国と下総国を結ぶ」という意味があるくらいで、徳川家康の開府の頃は、まだ下総国に属していて江戸・武蔵国ではなかったのだ。余談になるが忠臣蔵で有名な吉良上野介も松の廊下の刃傷事件後に、幕府の命によりそれまでの呉服橋御門内の屋敷から本所へ拝領替えとなった際、いくら高家を辞したからといっても上野介はこれでは自分は幕府から見限られたかと嘆いたとされる、いまだ下総の匂いを残す寂しい場所であり、水はけが悪く雨のたびにジメジメする土地であった。この徳山藩拝領の本所屋敷もこの吉良邸のあった場所からわずか百メートルくらいの場所である。

もっと良い（広い）場所をとの請願が聞き入れられたのだろうか、一ヶ月後（たぶん居住開始前）に上屋敷は麻布今井谷（町）の約六千二百三十坪（当初）に拝領替

えとなった（現在の港区赤坂八丁目・乃木神社、山王病院の裏手あたり）。



「新坂」と木標
写真反対側が上屋敷のあった場所。



麻布今井谷上屋敷

道をはさんだ北側の五百坪は嘉永三年（1850）に岡部庄九郎から相対替で取得したもの。図中北側から「新坂」を下りきったところに上屋敷はあった。図中北側の紀伊和歌山藩徳川家屋敷（現赤坂御所）南側の現青山通り以南のこの周辺も当時の敷地取り、道路がほぼ同じ形で現在に残っている。

この今井谷の上屋敷は享保四年（一七一九）四月、備後三次藩第四代藩主浅野長経が十一歳で没し、嗣子が無く三次藩が除封されたために空いていた屋敷であった。確かにこちらのほうが、お城にもほど近く登城にも便利がいい場所である。ちなみにこの備後三次藩初代藩主浅野長治の三女が赤穂藩浅野内匠頭長矩夫人の阿久里である。刃傷事件後落飾して瑤泉院と称し、この今井谷の屋敷からすぐそばにある実家の三次藩赤坂下屋敷（現在の氷川神社）に居住していた（三代浅野長澄が藩主の時代）。そこで瑤泉院が亡くなったのは正徳四年（一七一四）で、徳山藩が今井谷屋敷拝領のわずか五年前であった。

芝高輪二本榎下屋敷

今井谷に上屋敷を拝領した同じ年（一七一九年）に下屋敷を、芝高輪二本榎に拝領している。こちらの・・・

（以下次号へ）

次回の掲載では幕末・明治維新という歴史の中で徳山藩江戸藩邸がどうなったのかを、思いもかけぬ大奥との

繋がり等も織り交ぜながら探求してみたい。

つづく

※1 江戸城詰の間

江戸城本丸内では、各大名の家格ごと、外様であるか譜代であるか、將軍との親疎の差などに応じて、異なる控室が割り振られていた。

「参考文献」

「江戸大絵図」 東洋文庫所蔵 元禄年間頃

「公儀所日乗」 毛利家文庫 山口県文書館

「徳山市史料」 徳山市役所 昭和四十一年

各屋敷の取得年は諸説あり、また坪数は年代により変化するが

基本は徳山市史料によるものとしている。また徳山市史料

自体にも諸説記載されている。

「江戸お留守居役の日記」 山本博文著 平成三年

「問部家文書」 問部家文書刊行会編 鯖江市 昭和六十三年

「私弟坪数」 鯖江市旭町植田家文書

「東京市史稿 市街史第七」 東京都公文書館

「江戸切絵図（嘉永年間）」 国立国会図書館

「江戸方角安見図（延宝年間）」 国立国会図書館

「御府内場未往還其外沿革図書（延宝〜万延年間）」 国立国会図書館

館

「大日本地誌体系 御府内備考 第四卷（雄山閣）」 国立国会図

書館

徳山藩毛利家江戸屋敷の変遷

西暦	和暦	小石川 上屋敷	愛宕下 下屋敷	三田小山 上屋敷	目黒行人坂 下屋敷	下渋谷村 抱屋敷	渋谷新橋町 下屋敷	北本所 上屋敷	麻布今井町 上屋敷	高輪二本坂 下屋敷
坪数(取得時)		3,000	2,152	5,910	不詳	4,500	3,100	3,000	6,230	2,254
1617	元和 3									
1633	寛永 10	押領跡願								
1634	寛永 11	下松藩公認								
1635	寛永 12	押領								
1647	正保 4		押領昔請?							
1648	正保 5									
	慶安 1									
1651	慶安 4		昔請?							
1654	承応 3			押領						
1657	明暦 3	類焼	類焼	類焼	←明暦の大火					
1658	明暦 4	返上等不詳								
	万治 1			押領?						
1661	寛文 1			嚴敷造営						
1663	寛文 3		売却		奥岩下の代官地					
1668	寛文 8			類焼		三田類焼時建屋				
1669	寛文 9						押領			
1680	延宝 8						一部焼失			
1694	元禄 7					売却				
1695	元禄 8			焼失						
1696	元禄 9			再造	明王院に寄付					
1710	宝永 7									
1711	宝永 8						焼失			
	正徳 1						再造			
1716	享保 1			召上げ						
1717	享保 2									
1718	享保 3									
1719	享保 4									
1745	延享 2							4月押領・返上	7月押領	押領 類焼
1760	宝暦 10									本家が地蔵堂(1644坪)
1783	天明 3								一部焼失	
1787	天明 7								焼失	
1788	天明 8								再造	
1789	天明 9									
1792	寛政 4								266坪替地	
1794	寛政 6								類焼	
1795	寛政 7								焼失	
1801	享和 1								再造	
1831	天保 2								309坪替地	100坪替地
1845	弘化 2									類焼
1850	嘉永 3									類焼
1852	嘉永 5								向側500坪替地	200坪替地
1861	万延 2								2,000坪替地	416坪替地
	文久 1								150坪借替小路	
1864	文久 4									
	元治 1								召上げ	召上げ
1865	元治 2								須板藩へ	
1869	慶応 1									
1869	明治 2									
1870	明治 3								6,081坪押領	
1871	明治 4								返上	